

本学教育学科・短大幼児教育学科 2016 年夏期短期海外研修
プログラム改善の成果と課題

Achievements and problems of the 2016 summer short-term overseas training
in the education department

金子 健治, 金子 正子, 堀 美和

KANEKO Kenji, KANEKO Masako, HORI Miwa

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 12 号 2017 年

【教育・保育実践ノート】

本学教育学科・短大幼児教育学科 2016 年夏期短期海外研修
プログラム改善の成果と課題

Achievements and problems of the 2016 summer short-term overseas training
in the education department

金子健治* 金子正子* 堀美和*

KANEKO Kenji* KANEKO Masako* HORI Miwa*

要旨

本研究の目的は本学教育学科・幼児教育学科 2016 年夏期短期海外研修プログラム改善の成果と課題を明らかにすることである。2015 年度の夏期短期海外研修の成果と課題は金子ら（2015）によって明らかにされた。その結果を元に 2016 年度のプログラムに改善を加えた。主な改善点は、レーニア山旅行中止、小学校のサマーキャンプへの参加、学びの振り返りの時間を持つなどである。改善の結果、学生がどのように評価しているかを調査した。調査は質問紙法（2015 年度、2016 年度の結果比較）と添乗員のプログラム記録比較と引率者・同行者の観察によって行った。その結果、昨年度に比べて研修の満足度が高くなったり、楽しかったことに教育施設の訪問を挙げる学生が増えてきたりなどプラスの効果が見られた。

1 問題の所在

文部科学省は、グローバル化に対応した人材を育成するために、グローバル人材育成コミュニティを民間と協力して設立し、留学促進キャンペーン「とびたて留学 JAPAN」を 2013 年から行っている。「とびたて留学 JAPAN」は官民共同で若者の海外留学を促進しようとして事業を行っている。海外留学は 1 週間から 3 ヶ月の短期と半年から 2 年間の長期に区分され、短期も長期も促進しようとしている。

多くの日本の大学や短期大学で海外留学プログラムが実施されているが、武庫川女子大学文学部教育学科・短大幼児教育学科の米国ワシントン州 St. Martin's University（以下 SMU と省略）海外研修が昨年度に引き続き、行われた。これは、短期のプログラムに属するものである。短期海外研修プログラムに関する研究はいくつか報告されている。伊佐（2016）は、語学研修者と海外幼児教育参加者の「自信感」の伸びがみられたと報告している。稲葉（2015）は短期研修だけで発信力や英語運用力が特段高まったとは言えないが、異文化体験を通じて、海外の文化への興味・関心を高め、コミュニケーションの方法や価値観の相違等に関する様々な気づきを促したという点では成果があったと報告している。本学教育学科での海外研修については、北口（2009）が 4 ヶ月の MFWI プログラムについて英語能力が高まるだけでなく、教育に関する理解も深まったと報告している。

金子（2015）は 3 週間の本学の短期海外研修プログラムについてその成果と課題を明らかにした。明らかにされた課題は大きく 3 点あった。一つは、研修プログラムに休日や振り返りを入れる必要があること、健康上の問題が発生した場合の対処について明確化する必要があること、事前指導等でマナー等について触れる必要があることである。本年度は、これらの点について留意してプログラムを改善した。今まで、この研修プログラムは 30 年以上にわたり行われてきたが、前年度の研修により明らかにされた成果と課題から次年度の研修のプログラムの改善を図り、その成果と課題を明らかにするということをしてこなかった。今回のプログラム改善の成果と課題を明らかにすることは、今後の研修を行う上で、重要な知見を得られると考えた。

2 研究の目的

本研究の目的は、武庫川女子大学教育学科・短大幼児教育学科 2015 年夏期短期海外研修（以後、2015SMU 研修と略）と武庫川女子大学教育学科・短大幼児教育学科 2016 年夏期短期海外研修（以後、2016SMU 研修と略）を比較して、プログラム改善の成果と課題を明らかにすることである。

3 研究の方法

研究の目的を達成するために、以下の事を行った。

* 武庫川女子大学（Mukogawa Women's University）

・研修半ばでのフィードバックの時間

削除したプログラムは、地元の消防署以外を除いては、ワシントン州、アリゾナ州あるいはシアトルの観光名所である。しかしながら、それぞれ以下の理由により削除することとした。

まず、レーニア山への一日旅行であるが、SMU から遠方にあるため、バスで片道 3 時間、往復で 6 時間を要する。学生は一日の大半をバス移動に費やすことになる。確かにレーニア山は、ワシントン州のシンボルとも言える美しい山である。しかし、6 時間もバス移動に要することや、天候に左右されること、また、現地まで行かなくても、他のプログラムのバス移動の際に幾度もバスから眺めることができることを考慮すると、削除してもよいと考えた。

シアトルにおけるダックバスツアーは、結果的に学生の自由時間を奪ってしまってプログラムの消化に迫られる状態になったこと、また何より 2015 年 8 月に事故を起こし、多くの中国人留学生が命を落としたことから中止とした。

セドナ観光や消防署の見学も、限られた時間に優先して行くほどの必要性は見いだせず、中止とした。

一方、プログラムの中止により時間および経済に余裕が出た分を、プログラムの参加者のニーズに合わせ、プログラムの変更や人員の増員に用いた。

上記プログラム削除により与えられた余裕により、基本的な英語教授法と実践を含むワークショップをプログラムに新たに加えることができた。小学校では 2020 年度から英語を教科として授業で扱うことになるので、将来小学校教員を目指す学生にとっては、関心のある内容となった。

また、昨年度の SMU スタッフとの振り返りの中で、小学生のいる教育施設の見学希望を伝えていたのであるが、スタッフが Mt. View 小学校のデイキャンプの見学を交渉し、可能としてくれていた。学生たちは 3 時間に渡って現地の小学生約 60 名と共に折り紙や習字、ボール遊びやダンスなどの活動をしながら交流したのみならず、昼食も共にして小学生たちと話す時間を持つことができた。このデイキャンプは、担当スタッフにより大変よくプログラムが構成されており、学生は活動内容や指導方法から多くの示唆を得たようである。そのことは、後に述べる事後アンケートの結果にも表れている。

ワークショップ内容や見学施設以外にも改善できたこととして、Cultural Liaison（学生とともに行動し、現地での生活習慣や英語、異文化理解などの面でサポートしてくれる学生と同世代の現地の若者）の学生一人当たりの数の増員がある。昨年度は、19 人の参加者に対して 2 人、つまり、10 人に 1 人の割合であったが、どうしても全員が個人的に親しく交流することは難しく、CL の 2 人が

特別な存在としてスター扱いされてしまうような面があったが、今年度は、10 人の学生に対して 2 人の CL が付き添ってくれたおかげで、昨年度と比較してより深く対等な友人としての交流ができていたように見受けられた。SMU を離れるときも別れが辛かったようであるが、帰国後も友人として LINE などを通じて連絡を取り合っているようである。文化背景の異なる相手と母語ではない言語を用いて心を通い合わせることができたという経験は、今後も世界に目を向け、関心を持ち続けていくために、大きな動機付けと自信になったと言える。

予算的な面だけでなく、時間的な面でも余裕が持てたため、プログラムの初期に CL と共に活動する Team Building Activity に時間を使えたことも上記のような関係を築くことに貢献したと考えられる。

それから、昨年度はスケジュールに追われて振り返りの時間が取れなかったという反省から、今年度は研修中に 2 回の振り返りの時間を取った。

1 回目は、セーフコフィールドで観戦したマリナーズの試合から気づいたことを分かち合った。その中で、試合の前に歌われた歌“God Bless America”の意味や、チームに貢献した引退選手や、国のために尽力した人、そして、この日は特別に African American を称える日であったのだが、そのような敬意を払うべき対象に対して、皆で起立して称える（honor）という価値観や文化について話すことができた。観戦を単に楽しい経験だったということで済ませるのではなく、振り返りの時間を設けることにより、米国の価値観や文化を学ぶ機会とすることができた。

2 回目は、学生たちに、キャンパスに掲げられている旗をよく観察しておくようにという課題を与えた後に行った。旗には、“Faith” “Reason” “Service” “Community” という 4 つの語が書かれており、これらは、SMU の価値観を示すものである。それは、大学では、科学的な知識を身につけるとともに、地域の人々のために奉仕しようとする精神を培うことが大切だということを意味する。学生たちは大学の価値観に熱心に聞き入っていた。大学での学びや研究が確かな価値観に支えられていることが大切なことは言うまでもない。それは、武庫川学院の教育目標にも通ずる姿勢であろう。

これらの振り返りの内容は、教育とは直接関係が無いように見えるが、アメリカの文化の一部であり、教育にはその場所の文化が大きな影響を与えるものであることから教育を幅広い見地から理解するために取り上げた。

今回の事後アンケートでは、自由記述欄に「自分の成長」を挙げた学生が複数おり、昨年度と違う点である。これは、今年度は自分で考え、振り返る時間を取ったこととも関係があるのではないかと思われる。

②スケジュールの流れの改善点と成果

本項目では、研修プログラム全体の流れについて述べ

る。2015 年度と 2016 年度を比べて大きく異なる点は、以下の通りである。

(a)ワークショップを 2015 年度には、現地到着後 3 日目、4 日目、7 日目、8 日目というように、日程の早いタイミングに入れていた。一方 2016 年度には、5 日目、7 日目、10 日目、11 日目というように、他の活動をした後にワークショップが入り、SMU での滞在期間全般にわたって行われる配分となっている。2015 年度には、ワークショップ中にまだ時差ぼけの症状があつて辛そうな学生や、疲れた様子の学生もいたが、2016 年度には、時差ぼけが解消したタイミングであったこと、また、多くの施設見学などの体験を経た後であったため問題意識や動機が高まっていたこと、そして、スケジュールが過密でなく適度なゆとりがあったことなどから、受講中に疲れた様子や眠そうな様子を示す学生は皆無であり、すべてのワークショップに大変積極的に参加することができていた。

(b)項目(a)で述べたようにプログラムを減らしたことにより、夜の時間帯をゆったりと過ごせる日が多く、学生同士の交流や休息の時間が取れていた。また、それにより、学生も時間的な圧迫感やストレスを感じる事が少なかったようである。事後アンケートにも、昨年度にあったような、「スケジュールがきつかった」「丸一日休みの日がほしい」などの記述はなく、「毎日がとても充実していた」という記述が多かった。「よいもの」であっても、多すぎると、ゆとりがなくなってしまう、消化するだけの活動になってしまう。今回は思い切って「よいもの」であってもカットし、「最善のもの」を選ぶ姿勢でプログラムをスリムにしたことが、このような満足感、充足感に繋がったと考える。

以上、プログラム内容とスケジュールの流れの改善点と成果を昨年度との比較において述べた。

二年続けて本海外研修に関わる事ができたおかげで、一年目に明らかになった問題点を二年目に改善することができた。

(2) 質問紙による調査結果の比較

2015SMU 研修と 2016SMU 研修の後、参加した学生対象にアンケートを実施し、その結果を比較して、プログラム改善の効果を明らかにした。本研究に使用した質問は、質問 1 「このプログラムに満足でしたか」、質問 2 「このプログラムであなたの目標は達成されましたか」、質問 3 「このプログラムの費用は高いと感じますか、それとも安いと感じますか」である。質問に対して とても満足した ほぼ満足 普通 やや不満 とても不満等の 5 件法で回答してもらった。2015 年と 2016 年の学生の評価を比較した。以下にそれぞれの質問に対する結果を示す。

① 質問 1 このプログラムに満足でしたかの調査結果

質問 1 このプログラムに満足でしたかに対する参加学生の回答数を表 1 に示す。

表 1 質問 1 「このプログラムに満足でしたか」に対する学生の回答数（人）

回答	2015年	2016年
とても満足	15	10
ほぼ満足	4	0
普通	0	0
やや不満	0	0
とても不満	0	0
平均点	3.8	4.0

この結果からそれぞれの年度で回答の割合を算出し、図 1 に示した。

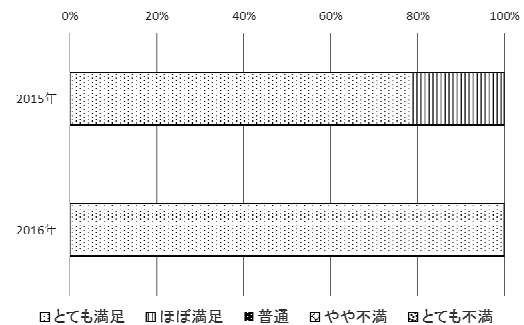


図 1 このプログラムに満足でしたかに対する学生の回答分布

図 1 から、2015 年度に比べて 2016 年度はほぼ満足と回答した学生がいなくなって、全員がとても満足であったと回答したことがわかる。

さらにそれぞれの年度で「とても満足した」を 4 点、「ほぼ満足した」を 3 点、「普通」を 2 点、「やや不満」を 1 点、「とても不満」を 0 点として平均点を算出し、研修の満足感とした。その結果を図 2 に示す。

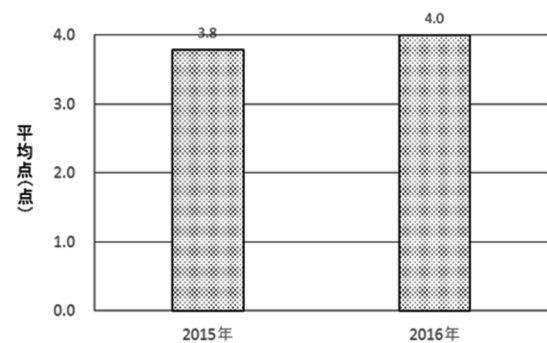


図 2 満足感の変化

図 2 から満足度は 2015 年度に比べて 2016 年度の方がやや高くなっている。しかし、分散分析の結果 $F(1,27)=2.48$, $p>0.1$ であり、有意な差は認められなかった。

② 質問 2 「目標を達成したか」に対する調査結果

質問 2 目標を達成したかに対する学生の回答数を表 2 に示す。

表 2 質問 2 「目標を達成したか」に対する学生の回答数（人）

回答	2015年	2016年
十分に達成	7	6
ほぼ達成	9	4
普通	2	0
やや不十分	1	0
全く不十分	0	0
平均点	3.2	3.6

この結果からそれぞれの年度での回答の割合を算出して、図 3 に示した。

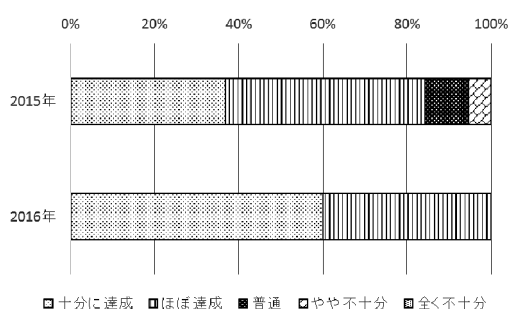


図 3 目標を達成したかに対する学生の回答分布

図 3 から 2016 年は 2015 年に比べて普通、やや不十分と回答する学生数が 0 になり、十分に達成、ほぼ達成と感じる学生の割合が相対的に増えていることがわかる。

さらに「十分に達成した」を 4 点、「ほぼ達成した」を 3 点、「普通」を 2 点、「やや不十分」を 1 点、「全く不十分」を 0 点として平均点を算出し目標達成感とした。その結果を図 4 に示す。

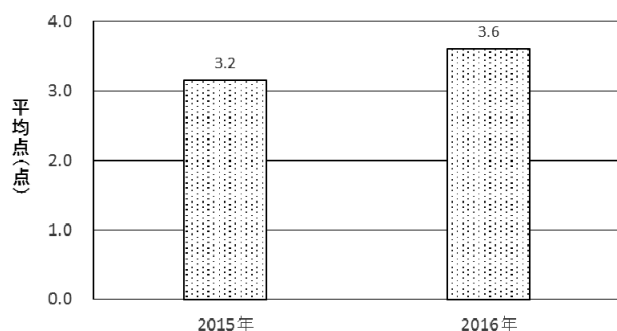


図 4 目標達成感の変化

達成感は 2015 年が 3.2 点、2016 年が 3.6 点であり、2016 年度の方がやや高くなっている。しかし、分散分析の結果 $F(1,27)=2.32, p>0.1$ であり、有意な差は認められなかった。

③ 質問 3 「費用について高いと感じるか安いと感じるか」の調査結果

質問 3 費用を高いと感じるか、高いと感じるかに対する学生の回答数を表 3 に示す。

表 3 費用は安いと感じるか高いと感じるかについての質問に対する学生の回答数（人）

回答	2015年	2016年
とても安い	0	2
まあまあ安い	1	2
ちょうど良い	8	4
ちょっと高い	10	2
とても高い	0	0
平均点	1.5	2.4

表 3 から、それぞれの回答数の割合を算出し、図 5 に示す。図 5 から 2016 年は 2015 年に比べてちょっと高いと感じる学生の割合が大幅に減少し、さらに 2015 年には見られなかったとても安いと感じる学生が 20% 程度みられることがわかる。

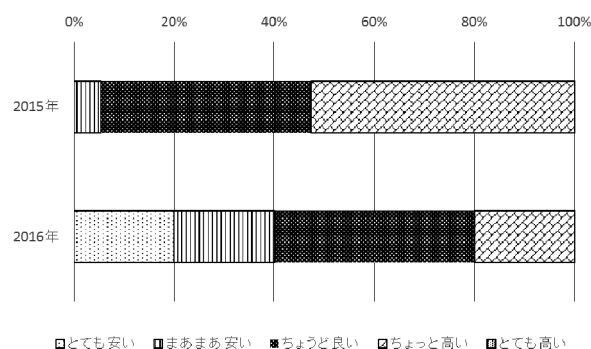


図 5 「費用を安いと感じるか高いと感じるか」についての質問に対する回答分布

さらに、「とても安い」を 4 点、「まあまあ安い」を 3 点、「ちょうど良い」を 2 点、「ちょっと高い」を 1 点、「とても高い」を 0 点として平均点を算出した。その結果を図 6 に示す。

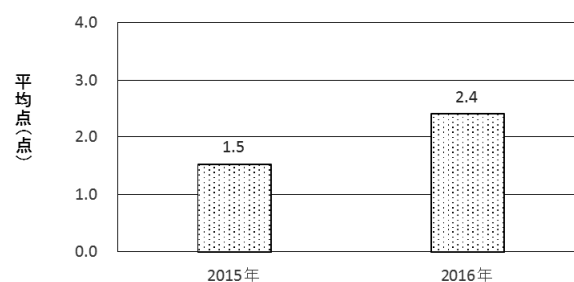


図 6 「費用を安いと感じるか高いと感じるか」の平均点の変化

図 6 から 2015 年は平均点が 1.5 であったが 2016 年には 2.4 と大きく変化していることがわかる。分散分析の結果 $F(1,27)=7.88$, $p<0.01$ であり、有意な差が認められた。安いと感じている学生が増えているといえる。

④ 自由記述の比較

自由記述で得た回答を比較し、プログラムの改善による効果を明らかにした。比較した質問は、質問一番楽しかった事は何ですか、最も大きな学びは何ですか、この研修でつらかったことや困難な事、研修全体の感想の 4 つである。表 4 は 一番楽しかったことは何ですかという質問に対する回答の主なものである。

表 4 「一番楽しかったことは何ですか」に対する主な回答

2015年	出現数	2016年	出現数
ホームステイ	9	教育施設訪問(Preschoolなど)	6
ディズニーランド	7	シアトル市内観光	6
いろいろな人との交流	3	現地での交流 (アイスクリームパーティーなど)	5

表 4 から、一番楽しかったこととして 2015 年はホームステイがあげられているが、2016 年は教育施設訪問があげられていることがわかる。

表 5 に最も大きな学びは何ですかに対する回答の主なものを示す。

表 5 「最も大きな学びは何ですか」に対する主な回答

2015年	出現数	2016年	出現数
文化の違いや多様性に気づいた	8	コミュニケーション・人との交流	9
英語能力が十分でなくても友達になったりコミュニケーションができる	5	アメリカの幼稚園・小学校の仕組み	1
日本とアメリカの教育の違い	3	多様な文化	1

表 5 から、2015 年も 2016 年もほぼコミュニケーションや人との交流があげられていて、大きな変化が無かったことがわかる。

表 6 に今回の研修でつらかったこと、困難を感じたことは何ですかに対する主な回答を示す。

表 6 「今回の研修でつらかったこと、困難を感じた事」に対する主な回答

2015年	出現数	2016年	出現数
スケジュールがきつかった(1日休みの日が欲しい)	4	英語でのコミュニケーション	7
英語で自分の考えを表現する事	2	大学カフェテリアでの食事	1
英語を聞き取ること	2		

表 6 から、2016 年はスケジュールがきつかったという回答は全く見られなくなったことがわかる。その代わり、英語でのコミュニケーションに困難を感じる学生が大きく増えていることがわかる。

この研修全体についての感想を次に示す。

2015 年の感想の主なものは次のようなものがあった。

- ・毎日毎日盛りだくさんで楽しかったです。参加してよかった。
- ・ホームステイが本当に楽しくて素晴らしかったです。
- ・協調性がやっぱり大切です。
- ・本当に行って良かったと思える。人生の思い出となるものになった。
- ・毎日いろんな経験をして最高に楽しい旅行でした。もっと英語を勉強しているんな国の人と関わりを持ってみたいと感じました。
- ・自分の世界観が前と変わってとても貴重な体験でした。

2016 年の感想の主なものは次のようなものがあった。

- ・英語は単語単語で全然喋れなかったけど、聞く力や伝えようとする思いが大切なんだと学びました。その他、プレスクールやYMCA、デキャンピングを訪問するなど教育学科ならではのプランではとても貴重な体験ができたと思います。
- ・すべてのプログラムが楽しくて、悪いところが一つもない素晴らしい旅になった。
- ・今でも会えなくて寂しく感じるほどの素敵な出会いがあり、国境を越えて仲間ができたことはとても大きな経験でした。
- ・もっと英語を話せるようになりたいと意識も高めることもできて、この研修に参加して心の底からよかったと思う。
- ・アメリカの幼稚園の訪問、現地の人との交流、ホームステイ、観光、様々なことがこの研修に含まれていて短い期間ででしたがいろんな体験と思い出を作ることができました。来年も参加できるならしたいと思います！また、アメリカの方がこちらに来たときにウェルカムパーティーなどに参加したいと思いました。

2015 年と 2016 年の感想を比較すると、2016 年の方が教育施設の訪問などを貴重な体験であったと評価したり、アメリカからこちらに来た時にウェルカムパーティーに参加したいと考えたり具体的な行動につながる感想が得られたことがわかる。

(3) 引率助手の所見

引率助手は、事前指導、旅行中、事後指導まで一貫して学生に最も近いところで学生を指導したりサポートしたりした。年齢が学生と近いこともあり、学生の実態を最もよく知りうる立場である。従って引率助手の観察による評価も重要な知見が得られる。以下に引率助手の所見を示す。

① 事前研修

本プログラムは、参加学生の異文化理解と交流に重点を置いたプログラムである。短期の海外研修プログラムの効果を上げるため、5 月下旬から週 1 回・全 8 回の事前研修会を行った。内容としては下記のとおりである。

- 第 1 回 海外研修への心構え
- 第 2 回 海外旅行、渡航の事務的手続きについて
- 第 3 回 海外で生活する上での注意点
- 第 4 回 コミュニケーションのコツ
- 第 5 回 ホームステイの心構え
- 第 6 回 日本とアメリカの教育
- 第 7 回、8 回 英会話レッスン

このように、様々な内容に取り組んでいる。その中で力を入れたのが「海外研修への心構え」「コミュニケーションのコツ」である。本学科は英語を専門として学んで

いる学科ではないので、英語での会話やコミュニケーションに不安を持っている学生も少なくはない。また、外国の人との交流経験のない学生も多い。そのため、まずは日本とアメリカの文化の違いを知り、英語での簡単な受け答えのレッスンの機会を作ることで海外研修への心構えを持てるようにした。

「コミュニケーションのコツ」では、ホームステイの心構えについても話した。ホームステイでの日本人とアメリカ人のもてなし方の違いも学び、家族としてどう行動すべきかを学んだ。各家庭で生活リズムやルールが異なるが、他の家族と比較することのないように伝えた。

今年度の研修は、昨年度に比べて少人数であったため 2 年生を中心として、積極的にお互いに打ち解けようとする姿勢がみられた。昨今の不穏な国際情勢のせいもあり、安全面においてもお互いに情報交換していた。

② プログラムの主な内容と成果について

(a) アメリカの教育や歴史、生活を学ぶ

SMU での講義に加え、州議事堂の見学や図書館の見学等、様々な面からアメリカを知る機会を持った。

また、プレスクール等の教育施設を訪問して子どもたちと触れ合った。実際に自らの目で現場を観察し、そこで働く方との会話を通して日本とアメリカの教育の違いなどを知ることができ更に学びが深まった。

(b) 現地の人との交流

SMU 関係者、ホストファミリー以外の現地の人との交流を多く持つことができた。現地で働く日本人の方の紹介で、現地の人と交流する会を開催した。学生たちで固まることのないように間隔をあけて席につき、約 2 時間の交流会だった。学生たちは最初緊張していたが、徐々に話題を探しながら自分たちの知っている単語とジェスチャーで会話を楽しむようになっていた。知らない人と会話を弾ませることは日本人同士でも難しいことだが、自分の英語が通じ、コミュニケーションを取ることができた喜びがその後の研修での大きなモチベーションと自信にもつながったと思う。

(c) ホームステイ

最初はホストファミリーに慣れ親しむことができるか不安を抱いていた学生も多かった。しかし、現地の人との交流の経験があったため、前向きに取り組もうとする学生が多かった。日を重ねるごとに各家庭の生活リズムやルールに慣れることができていたように思う。話題作りや自分の意見を伝えることに苦労している学生も単語を並べたり、ジェスチャーを取り入れたりしながらホストファミリーとの仲を深めていった。

(d) 研修旅行

SMU での研修を終え、グランドキャニオンの見学ツアーやディズニールランドツアー等の研修旅行がスタートした。引率者・添乗員が安全面に注意を払いながら無事に全プログラムを終えることができた。

③ 事後研修

帰国後は、研修についての体験をまとめて冊子を作る。改めて研修での出来事や経験を振り返ることで学生たちの自信や海外についての関心を高めることが目的である。3 週間という短期研修ではあるが、自分を表現する難しさや自分の意見を伝えることができた喜びによって海外についての関心は高まったと言えるだろう。

6 考察

以上の調査結果をふまえてプログラム改善の成果と課題について述べる。

まず、2016SMU 研修では、不要と思われるレーニア山観光やダックバスツアーをやめて、スケジュール全体にゆとりをもたせた。次に、幼稚園や保育園だけではなく、小学生と交流できるプログラムを追加した。さらに、振り返りの時間を加え、学生が自分たちの学んでいることをよく理解できるように配慮した。このような改善の効果は、表 6 に示されるようにスケジュールがきついという意見が無くなったことや、表 4 に一番楽しかったこととして教育施設の訪問があげられていることに現れている。図 2 や図 4 から満足感や目標達成感は 2015 年から高い値を示してはいたものの、有意な変化は見られなかった。しかし、図 1 からほぼ満足と回答する学生が無くなって、全員がとても満足と回答していることや、図 3 から目標を達成することについて、十分に達成した、ほぼ達成したと回答する学生だけになったことを考慮すると、改善の効果がみられると言える。

スケジュールで、2015SMU 研修では、到着した次の日からワークショップが始まったが、2016SMU 研修では、到着の次の日は野球観戦やショッピングモール、その次の日もオリンピック市内見学、Team Building Activities など、体を動かすプログラムが殆どであった。この影響で時差ぼけから回復する事ができただけではなく、学生間や CL との関係が深まり、その後の大学での研修に学生は安心して集中的に取り組むことができたといえる。2015SMU 研修では、到着の次の日からワークショップが始まったので、体調が回復しないままの学生が何人かいて、ワークショップで眠そうな表情をしている学生がいたが、今年度はそのような学生は見られなかった。

図 6 から費用を安いと感じる学生が明らかに増加していることがわかる。この事は、プログラム改善の大きな成果であったといえる。この事が影響して、感想でもう一度参加したいと記述する学生が見られるようになった。

と思われる。

8月11日の夜に行われた現地の方々とアイスクリームを食べながらのインフォーマルな交流会は複数の学生がとてもよかったと述べている。このような機会に学生は英語を聞いたり話したりする事に自然に親しみ慣れていくように思われる。

今年度はダックバスツアーとレーニア山観光をやめて、エリオット湾クルーズになった。学生は海からシアトルを見ることができたし、天候に恵まれたこともあって、とても喜んでいて。この時、学生は大変感激して、「これなら安い」と言っていたことから考えると、費用が安いと感じる学生が増えることにつながっていたのかもしれない。

今後の課題として一番大きな事は参加者の減少である。2015年は19人参加したが、2016年は10人であった。原因は2015年パリにおけるテロ事件の影響や国際情勢の不安などもあると思うが、今後参加者がせめて20人程度になるようにしたい。そのためには、渡航費用を下げて参加しやすくする工夫なども必要になってくるかもしれない。また、今後の国際情勢を考えると、研修場所や事件発生時の対応なども一層具体的にかつ慎重に検討する必要がある。

次に参加学生は研修を通じて英語や外国とのコミュニケーションに高い意欲をもち始めている。このような意欲を事前指導、事後指導で効果的にフォローアップしていく事ができれば、さらに研修の価値が高まっていくと考えられる。現在はまだ十分とはいえない。

7 研究のまとめ

今回、ゆとりのもてるプログラムにする、振り返りの時間をもつ、小学生との交流プログラムを加えるなどの改善をした結果、学生の研修への評価が高まり教育の違いなどへの関心が高まった。また研修の最初から大学でのワークショップではなく野球観戦やショッピングなど体を動かすプログラムを導入するように改善した結果、体調を崩す学生は見られなくなった。一方、参加者増加や国際情勢の変化への対応、意欲の高まった学生へのフォローアップの必要性などが今後の課題として残された。

8 謝辞

プログラムの大幅なカットは、昨年度のSMUでの研修終了時にスタッフに提案したときは、驚きを持って受け止められた。有名なレーニア山への一日旅行の取りやめなどは、想定外の提案であったようである。しかし、こちらの考えや意図を伝える中で、理解し、受け入れ、新しい見学施設の開拓や新しいワークショップの講師の人選など大変面倒な作業にも前向きに取り組んでくれた。SMUスタッフのこのプログラムに対する真摯な姿勢に

敬意と感謝の念を払いたい。

また、今回のプログラム改善のために、協力してくださったSMU研修担当者やアサヒトラベルの方々には心から感謝したい。アサヒトラベルは、スケジュールの面でこちらの要望を受けとめ、行き帰りの飛行機の便のスケジュールを、希望する到着時間に合わせて手配してくれるなど、協力してくれた。おかげで、学生は往復のフライトも含めて無理のないスケジュールで研修旅行に参加することができた。

今後も年度により状況やニーズが異なれば、新たに改善すべき点も出てくることだろう。そのようなときに、この記録が少しでも役に立てば幸いである。

9 付記

尚、アンケートなどの調査結果については、参加者の自由意思で回答の可否が決められること、個人が特定されない配慮を行うこと、結果公表の方法等を書面と口頭で説明し、同意を得た上で行った。

ー引用文献ー

- (1) 伊佐雅子「大学生の短期海外研修の効果：学生の自信形成要因の観点から」『沖縄キリスト教学院大学論集』(12), 2016, pp.36-49.
- (2) 稲葉みどり「米国短期研修プログラムの教育的効果の考察ー現地での活動の省察レポートの分析を通じてー教養と教育 15, 2015, pp.7-16.
- (3) 北口勝也「教員養成における海外留学の役割 MFWIプログラムの成果と展望」『武庫川女子大学文学部教育学科教育学研究論集 (4), 2009, pp.49-62.
- (4) 金子健治・北口勝也・金子正子・西谷有香・堀美和「本学教育学科・短大幼児教育学科 2015 夏期短期海外研修の成果と課題」『武庫川女子大学文学部教育学科教育学研究論集』11, 2016, pp. 23-29.